375.9
Wa20
資料室

實驗日本修身書卷五

尋常小學生徒用

30011
教科書文庫
3
110
31-1893
20000
14237

資料室
資料室
375.9
Wa20

明治廿六年九月十八日
文部省檢定濟

三宅米吉
中根淑
渡邊政吉
校閲
編纂

實驗日本修身書卷五

尋常小學生徒用

東京
金港堂書籍會社

14237

卷五

畠山氏

第一課　父母の恩

父母の恩の大いなることは、猶天のかぎりなきが如し、試に思へ、子のはじめて母の胎内にやどるや、父母共に其のすこやかに生まれ出でんことをいのり、已に生まるるや、衣をきせ、乳をあたへ、抱きかかへて、之を愛しみ、稍長ずれば、學校にわくりて、教へをうけしめ、其のかへりのわろきことあれば、惡友にさろはれもやせん、過失災難にかかりもやせんと氣づかひて、寸時も子の事を忘るるひまなし、されば子たるものは、いかでか其の大恩を知らでかなふべき。

世の中に思ひやれども子をこふる、
　思ひにまさる思ひなきかな。

人の子の親になりてぞわが親の、
　思ひはいとど思ひしらるる。

第二課　孝行

海山は限りあり、父母の恵みは限りなし、いかにして其の恩を報いんや、ただ孝を行ひて、其の恩の萬一を報ずべし。

伊達治左衛門は、父母に事へて、愛敬をつくし

人なり、常に鮮魚美酒を求め、魚は、必ず父母の好みをきき、味よく料理して、之をすすめたり。父母己れの室に來らんといへば、必ず先づ美味をまうけ、然る後父母のもとにゆき、色をやはらげ聲をよろこばしくして、「御二方、我が身體の健なるを試たまへ」とて、之を負ひて伴ひ來り、四方山の話を爲して、其の心をなぐさめたり。

父母に孝に。

第三課　孝行

昔美作(ミマサカ)の國に總助(ソウスケ)といふものあり、幼くして父を失ひ、母に養はれけるが、其の苦勞を思ひやりて、よく母のいふことをきき、何くれとなく手助けを爲したり。十五歳の時より、品物をたづさへて商ひに出で、或は人にやとはれ、賃錢をとりて、母を養ひけるが、其の仕へかた世の人にこにたり。朝は早く起きて、母の起くるをまち、

目さむれば、烟草(タバコ)をすすめ、湯をくみて、顏を洗はしめ、又茶をすすめ、食事は、必ず自らととのへ、其の好める品をかきたることなし。又外よりかへれば、まめやかにはたらきて、母に茶をすすめ、酒食を供し、商ひのもやうを話して、其の心を慰(ナグサ)むること、三十餘年の間一日の如くなりき。

大孝は、身を終るまで父母をしたふ。

第四課　兄弟

兄は弟に愛ふかく、弟は兄に敬あつくすべし。兄は弟惡しとて、似せて愛をうすくすべからず、弟は兄惡しとて、似せて不敬なるべからず、各我が道をつくすべし。

兄は父に次ぎて尊ぶべし、弟は父母の子なれば、我が子より愛すべし。

安藤直次、一つの名刀を持ちけるが、弟重信、心の中に其の刀をほしく思へり。或る時直次弟の家にゆきて、ゆるゆると物語りし、刀を遺して歸りたり。重信、家來をして之を追はしめ、刀を渡さんとしければ、直次別に刀を示し、「我が刀は此にあり、これは弟の家の刀なり」とて受取らざりき。

第五課　兄弟

昔讃岐の國に、勘七利左衛門といふ兄弟のものあり、兄は弟を愛し、弟は兄を敬ひて、其の間甚だ睦しかりき。

或る時田地の檢査ありて、人人の持ち高をあらためけるに、勘七は、是まで知らずして、弟の田を一段餘り取り込みて、耕し居たること分りたり。勘七大いに心をいため、村役人のはからひにまかせて、之を返したるに、弟は、兄のものになしたかれよとて、受け取らざりしが、村役人の諭しにより、遂に之を受けたり。其の後利左衛門家を買ひし時、勘七は、銀五百匁を持ちゆきて、多年の間田地を耕したる料をつくのはんとしたるに、利左衛門はかたく受けざりしが、又村役人の諭しにより、其の中より二百匁を受けたり。

兄弟に友に。

錦潮堂書籍會社

第六課　朋友

善をすすめ惡をいましむるは、朋友の道なり、其の過惡を見ながら諫めざるは、信なきなり、朋友に交る道にあらず。

板倉重宗京都にありける時、江戸の友人某長崎

の官吏となり、道すがら京師に立ちよりて、重宗を訪へり。重宗古き鏡を取り出ト其の人に示して、「是は、元の長崎奉行竹中重興の贈り物なり、後に余重興が、賄ひをむさぼり、身をあやまりしをきき、朝夕之を見て自ら戒めとせり、今之を君に贈りて餞にかふ、願はくは、君之を龜鑑として、潔白なる名を保たれよ」といましめたり。

朋友相信じ。

第七課　朋友

人と交るには、始めに能く其の人がらを見分くべし、も一人がらを見分けずして、妄りに交りをむすぶ時は、必ず悔ゆることあるべし、一旦交りをむすびたる後は、信をあつくして、終身かはることあるべからず。

昔會津に、田中三郎兵衛と菅勝兵衛といふ人あり、平生親しく交りしが、或る日二人役所にて事を評議し、意見あはず、互に顔色を變じて高聲にあらそひたり。人人之を見て、「此の後は、二人の間必ずうとくなるべし」と氣づかひたり。然るに田中は、役所をしりぞき宅にかへり、直ちに人をつかはして、菅をむかへしめたり。菅も亦すみやかに來り、平日の如く快く語りあひて、益す益す親しく交りたり。朋友信ならざれば、則ち其の交り絶にやすし。

第八課　威儀

凡そ人は、いかに學問ひろく、才行うるはしくとも、威儀具はらざれば、人の侮りを受けやすし、されば容貌を正しくし、立ち居を慎み、身なりをととのへ、言葉をつつしみて、威儀を修むべし。

藪孤山は、幼き時氣質かろがろしかりしかば、其の父、「君子重からざれば威あらず」といふ語をひきて、之をいましめたり。成長の後、友人某も亦同じ辭を以ていましめければ、孤山是より大いに心を用ひて、學問の外、更に威儀を修めて、氣高き人物となりたり。

淑人君子は、其の儀たがはず。

第九課　恭儉

むかし京都に、伊藤仁齋といふ名高き學者あり、其の頃多くの學者よりあつまりて、各其の説をたたかはすことありしに、初めは皆謹みて、威儀をよそほひ、静かに辯論せり。されども、己れの説のやぶれんとするに及びては、皆色をかへ、聲を高くして、思はず不恭のさまを爲しかど、仁齋のみは、終始恭謙を失はざりしかば、人皆其の德に服したり。

酒井忠勝は、謙退にして儉素を守りし人なり、或る時、召しつかひの小坊主、こよりの眞中にて、狀箱の封をなし、兩端を切りすてしかば、忠勝之を見て、「片端より用ふれば、二度の用を爲すべし、僅のものにても、無益に費せば、身を持ちくずの恐れあり、以後慎むべし」と誡められたりとぞ。

恭儉己れを持し。

第十課　忠實

公の職をつとめ、若しくは人の爲めに業を執るものは、忠實を旨として、其の職を勉むべし、かりそめにも、事を怠り、業をおろそかにすべからず。

昔安藝の國に、才助といふものあり、七歳の時染物屋にゆきて、其の業を習ひけるが、忠實たぐひなく、朝は早くおきて、染め物をほし、夜はおそくまではたらきて、翌日のしたくをなしたり。かくて、久しくはたらきけるうち、年も長じ、業も進みしかば、主人も故らに心を用ひ、給金をも增しあたへて、家をかまへしめたり。主人の死せし後は、其の子に事へしが、後の主人長病にて死し、其の家甚しく貧困におちいりしかば、才助は、遺族を我が家にむかへて、懇に養ひ、ひたすら主家の再興をはかりたり。

第十一課 油斷を誡む

塚原ト傳、弟子たちを伴ひて、道を行きけるに、垣につなげる馬、足をあげて弟子をけたり。然るに其の人、巧みに身をかはしてさけければ、見る人其の早わざを

ほめたるに、ト傳は、更に感心したる色なかりき。後ある人相謀り、ト傳を試んとて、其の通らんとする小道に、馬をつなぎ置きたるに、ト傳は、之を見、遠くさけて通りたり。人人望みを失ひ、其の事をト傳に語りければ、ト傳、「馬は、はぬべきものなれば、傍に近づかぬこころよけれ」といひたり。誠に用心の深き人といふべし。

油斷大敵。

第十二課　弘量

人の我れに不義無禮なるを怒り恨むべからず、これは人のあやまりなれば、我が心にあづからずただ我が身をかへりみて、我が無禮不義なるを自らせむべし。

後藤孫兵衛といふ人、原田左馬之助を見て、禮を行ひしに、左馬之助は、知らずして行きすぎたり。孫兵衛之を見て、大いに怒り、其の後は、左馬之助を見るごとに、殊更に無禮を加へければ、主人伊達政宗、孫兵衛を追はんとせしに、左馬之助は、「孫兵衛は、得がたき剛直の士なり」とて、之を止めたり。後孫兵衛は、左馬之助を以て、奸佞の士となし、之をきらんとせしに、左馬之助は、「私の怒りにたへで、君の恩を忘るることやあるべ」といひければ、孫兵衛はぢいりて、罪を謝したり。堪忍は、無事長久の基なり。怒りは敵と思へ。

第十三課　修省

すべて人人、我が惡しきことには心つかずして、ただ一すぢに我は善し、人は惡し、我は道理なり、人は無理なり、とばかり思ひて、我が惡しきこと、我が無理なることをさがしもとめず、我が身を誡むることなきは、あるまじきことなり、人の事をばさしおきて、我が身を省みて誡めつつしむべし、かくの如くすれば、禍おこることなし。

瀧鶴臺の妻は、常に身を省み、惡しき心おこれば、一つの毬に赤絲をまき、善き心おこれば、又別の毬に白絲をまき、しかして赤の毬を小さく、白の毬を大きくせんとつとめたり。

吾日に、三たび吾が身を省る。

第十四課　正直

正直は身を立て家を起すべき本なり。正直なれば、人にはづることなく、我が心にもはづることなし。人をあざむかず、我が心をあざむかず、身にくもりなく、いさぎよきこと鏡の如し。

或る人、主人の金二百兩をあづかりて、旅にいで、途にて馬にのり、金嚢（キンノウ）を鞍（クラ）にむすびたるまま、打ち忘れて宿屋に入りたり。かくて、夜半に目さめて、其の事を思ひ出し、心を煩はし居たるに、彼の馬方訪ひきたりて、金嚢をかへしたり。其の人深くよろこび、金十六兩を禮にあたへしに、辭してうけず、ただ「夜中まるりたれば、其の賃錢だけたまはれ」とて、わづか二百文をうけて去りたり。

不義にして富み且貴きは、浮べる雲の如し。

金港堂書籍會社

第十五課　節儉

儉約と吝嗇とは、似て非なるものなれば、よく其の區別を辨(ワキマ)へて、然る後儉約の方に從ふべし。

鍋島直正(ナベシマナホマサ)、德川齊昭(トクガハナリアキ)の賢明をしたひ、或る時これを訪ひて、良久しく語ら

ひけるに、日くれに及びて、やうやく粗食を出しければ、聞きしに似ざる吝嗇の人と思へり。やがて暇をつげて、玄關に至りけるに、齊昭一匹の名馬を指して、「之を君にまゐらすべし」といひければ、直正、齊昭の無用の費にを省き、有用の費にを惜まざるをさとりて、大いに感じ入り、是より心をかたむけて深く交りたり。

禮は、其の奢らんよりは、寧ろ儉せよ。

第十六課　節儉

一家を爲すものは、必ず不時の費にあるゆゑ、日用の中にて、少〻づつあましたき、其の費ににろなふべし。

岡野左内は、心がけよき人なり、常に儉約をつとめて、數萬の金を貯へ、時時之を室内にならべて樂しみとしけるに、人人其の心がけを知らずして、皆之をいやしみたり。ある日友人の爭ひをきき、金を取りちらしたるまま出でゆき、和解の爲めに三日を費し、事を終へて家に歸り、徐かに其の金を取りまとめければ、初めのいやしみたる人人、皆感服せり。又其の死する時、主人に三萬兩を獻じ、友人に數千金を分ちしかば、人人益す益す其の心がけに感じ入りたり。

凡そ財あらば、有益の事を爲すべし、財を吝むべからず、吾が力に從ひて施すべし。

第十七課　仁慈

世の中に、同じく人と生まれて、餓ゑ寒ゆる人亦多し、其の不幸あはれむべし、我が身餘財あらば、斯かる貧人に施し與へて、自ら樂しみ人をも樂しまむべし。

むかし武藏（ムサシ）の國に、新井孫助（アラヰマゴスケ）といふ人あり、或る年洪水（コウズイ）出でて、村人多く難儀しければ、米麥を惠みて貧人をたすけ、租稅も代りてをさめたき、其の後二百日ばかりの間は、何人をとはず、一人一合づつの麥をほどこしたり。又毎年歲暮には、米二斗づつを、貧人の親あるものにあたへて、孝養をつくさしめたり。

博愛衆に及し。

第十八課　忠恕

己れのいとへる事は、人も亦之をいとふべく、己れのつらく思ふ事は、人も亦つらく思ふべし、されば人は、何事に拘らず、己れの勝手のみを思ふべからず、人の身の上をも思ひやるべし。

昔京都に、中村惕齋（ナカムラテキサイ）といふ人あり、或る時近所に失火ありしに、多くの人人かけつけて、荷物を運び出したり。やがて風かはりて、火先他の方へ向

ひしかば、人人悦びて、「もはや安心なり」と言ひあへり。然るに惕齋は、少しも悦べる氣色なく、「今風下となりたる人人は、さぞ心を惱（ナヤマ）すならん、誠に氣の毒の至りなり」といひたり。人人之をききて、大いに恥ぢ入り、速かに風下の家にかけつけ、又荷物を運び出して、之をたすけたりとぞ。

忠恕道をさること、遠からず、己れに施して、願はずんば、人に施すことなかれ。

第十九課　勉學

凡そ人は、學問を修めて才智を研き、品行を善くし、且農工商の業を習ひて、身を立て家を興し、進みて人の爲め世の爲めをはかるべし。

塙保己一は、七歳の時、病

みて盲目となり、十五歳の時、江戸に出でて、鍼按摩などを學びしかど、其の藝すすまず、然れども書を讀むことを好み、常に人に乞ひて之を讀ましめ、能く覺えたきて忘れず、遂に文字を知り、和學を修め、名高き學者となりて、古今になき大部の書物を著し、總檢校に補せられたり。

學を修め、業を習ひ、以て智能を啓發し、德器を成就し。

第二十課　學藝

細川藤孝は、其の少かりし時、戰場に出で、敵の乘りすてたる馬を見て、其の主を求めたれども、見あたらずして引きかへしたり。然るに從者、馬の鞍の上をなでて、「未だ乘り下あたたかなれば、遠くは行かじ、古歌にも

君はまだとほくは行かじ我が袖の、
たもとのなみだかわきはてねば。

といふことあり、早く追ひかけたまへ」といふに、「よくこそ氣づきたれ」とて追ひ行きて、之を擊ち取りたり、是より心を和歌にひろめ、遂に其の奥義を極めたり。後石田三成の軍勢、其の居城を攻めて、糧を絶たんとせし時、後陽成天皇、藤孝を惜しませたまひ、寄せ手にさとして、圍みをとかしめたまへり。

藝は身を助く。

明治廿六年六月十日印刷
同　年六月廿七日發行

著作者　渡邊政吉
本郡區森川町壹番地

發行兼印刷者　金港堂書籍株式會社
日本橋區本町三丁目十七番地

代表者　右　社長　原亮三郎
下谷區龍泉寺町四百十番地

賣捌所　金港堂
大阪市東區南本町四丁目

金港堂
宮城縣仙臺市國分町五丁目

版權所有

定價　生徒用　入門卷　金四錢五厘　尋常卷　金六錢　教師用　入門卷　金四錢五厘　尋常卷　金六錢